

ガンダムSEED

秘密

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虚数時空間を漂っている少年を神が導き新たな世界へ、誘う。さて、少年の未来は。

目次

第3話	第2話	第1話
10	6	1

第1話

「ここは何処だ？」

誰かが、目覚めて辺りを見渡した。

「誰もいないのか？」

「いますよ」

何処からか、声が聞こえた。

「誰だ」

そう答えた。

周りの景色が光だした。

そして、人になった。

「はじめまして、原初の神の神和祇よ」

「僕の事を知っているのか？」

「はい、知っています」

「そうことは、君は、神か？」

「そう言う人もいます」

「そうか…で、その神が、僕に何かようでも？」
神に訪ねる？

「はい、私の世界に来てください」

「理由は？」

「貴方は、つねに暇をしています、それを新しい刺激をうけることによって、どのような人生を歩むのか、みてみたいと思っています」

「正直だね、いいよ…ちようど、暇だし」

「わかりました。では、私の加護を与えます。貴方の力は強大です。ですが、私の加護があれば、ある程度のリミッターになります」

「わかった」

「後、今から行く世界は、ガンダムSEEDの世界です」

「ガンダムSEED?…昔…暮らしていた世界だよな」

「はい、その世界です、後、この世界に持っていける、技術は少なくしてください」

「理由は？」

「ほとんどが、オーバートテクノロジーですから」

「わかったよ」

「では、さよなら」

神が応えると、床がなくなった。

「落とし穴」

そう言つて、落とし穴に吸い込まれた。

「さて、逝きましたか。私たちを楽しませてください」

どこまでもおちていくと、途中で止まった。

「うん、どうしたんだ」

辺りを見渡した。

「ソウイチよ」

自分を呼ぶ声がした。

「誰だ？」

「久しいな…ソウイチよ」

目の前に、金色のオーラを纏った、女性が現れた。

「貴女は、ロード・オブ・ナイトメア」

「その名で、喚ぶではない、ソウイチがつけた名で喚ぶがよい」

「わかったよ、リナ」

そう呼んだ。

「ソウイチよ、これから向かう世界に、滅ぼして欲しい人物が居る」

「え？」

いきなり伝えられた、発言に驚いた。

「どういう事だ？」

疑問をぶつける。

「好き勝手にする奴達は居るが、その人物は認めだれない」

「わかったよ、でも、あまりにも強い技術は、ダメみたいだし」

困った顔をする？

「それは大丈夫だ、私がなんとかしよう」

いきなり提案をしてきた。

「じゃあ、ヒュツケバイン、オリジナル戦艦、クロノゲートに、コーデイネーター、キー

パーソン、ゲートキーパーの力と魔法と気と技の力が欲しい」

「わかった」

そう了承証した。

「さて、逝くかな」

「さて、この二つの力をやろう」

そう言つて、二つの光輝く、箱を手渡してきた。

「これは？」

「秘密だ、では、逝くとよい」

そう言つて、ソウイチの体が光出して消えた。

第2話

「知らない天井だ」

起きたら知らない場所にいた。

「お目覚めになりましたか、ソウイチ」

ドアが開いて誰かが、入ってきた。

「なんだ、メイドさんじゃあないか…で、ここは？」

「ここは、この世界のソウイチの家の一つです」

「家ね…他にも在るの」

メイドさんに尋ねた。

「はい、今いる場所は、月です。あと、地球とコロニーに、二ヶ所づつ」

「そうか、今後の予定は？」

「学園に通ってもらいます」

「学園に？」

「はい、手続きは、これから行いますので、一緒に来てください」

「わかった」

皆様、ソウイチです!!今僕は、学園にいます!そして、何故か僕は校長室にいます。

「いやあく。本当に助かりました。貴方が来なければ、この学園は無くなってしまうすから... 本当にこれだけのお金を支払ってくれるのでしょうか?」

そう言つて、ある紙を見せてくる。

「ええ、そのお金は僕が払いますので安心してください。あと、入学金も払いますので」
「で、では、明日から登校してくるとゆうことでいいですか?」

「ええ。良いですよ。それでは」

〜次の日〜

「えっと、貴方が転校生のソウイチ・アヤサキ君?」

「はい、そうですよ。」

「自己紹介してなかったな、俺はダグバ・ゼバだ。これから宜しく。」

「改めて、僕はソウイチ・アヤサキです。こちらこそ宜しくお願いします。ダグバ先生。」

〜数分後〜

「おーい、みんな静かにしろ。今日のショートホームルームは転校生の紹介だ!!」

「おおおおおおお!!」

「先生!その転校生は女の子ですか?」

(定番のネタが聞こえた気がする。てか、何か異物が混じってたような...))

「残念ながら男の子だ!!」

「うそおおおおおおおおおお!!」

「五月蠅い!!では入って来て下さい。」

ガラガラガラ。

「皆さん、初めまして。僕の名前はソウイチ・アヤサキです。宜しくお願いします」

「えっ!!どう見ても女の子じゃないか!!」

「男の娘来たー!!」

「あと、変態は僕に近づかないで下さい。」

「ぐはああああああああ!!」

男子生徒に精神的ダメージ9999、男子生徒の心が引き裂かれた。

「抱き締めたいな...。」

「修正してやる!!」

「フッフッフ、今の私は阿修羅すら凌駕する存在だ!その程度の」

「五月蠅いので静かにしてください。」

「ガクガクブルブル…」

はあく。ようやく静かになった。席に座れないじゃないか！

「先生、僕の席は何処ですか？」

「あ、ああ。君の席はそのキラの隣だ。」

「!? (え)」

「わかりました」

キラの隣の席に、移動して、座った。

「これから宜しくお願ひします」

ソウイチは一瞬笑った。それに対してキラは…

「／／／よ、よろしく。」

（あれ、キラ照れてる?）

第3話

ソウイチの自己紹介終了後：

皆さん、ソウイチです！今隣の席の人との距離を縮める為に定番の技を使ってみます

！

「あのう。すみませんがノートを見せてもらっても良いですか？」

「…あ、ああ。はい。」

「ありがとうございます」

ううん。距離を縮めるのもしかしたら相当難しいかもしれない…

「…ねえ、君。えっと、ソウイチ君だっけ？」

「はい。あつてますよ。どうかしましたか？」

「もしかしなくても君、男の子だよね？」

「はい。男の子ですが、女の子扱いしないで下さい」

あつ、突き放すような言い方をしてしまった。くっ！失敗した。

「あつ、いや、気分を悪くしたなら謝るよ。ごめん」

「いえ、こちらでも少し強く言い過ぎました。ごめんなさい」

取り合えず謝っておこう。そこから関係性を築き上げてみせる!!

「…」

「…」

…あれ、ここから楽しいトークが始まる筈なのに。何故沈黙した…

（10分後）

「ありがとうございます。また後で他のノートも見せて下さると助かります」

「…ああ、後で渡すよ」

キーンコーンカーンコーン

1時間目の授業

「…では、この問題の計算式と答えをソウイチ答えなさい」

「…です」

「流石だな」

（今の問題僕、全然解んなかったのに…ソウイチだったけ？本当に凄いなあー。）

（今の問題がわかったのか!?)

くお昼休みく

「アスラン、一緒に食べよう！」

「いいぞ。ん？キラ、もしよかつたらこのハンバーグとそのロールキャベツ交換しないか？」

「…」

…どうやって話かけたら良いのかわからない!!

「…あのさあく。アスラン。あのソウイチって子誘わない？」

「…別にいいけど、いきなり話かけたらソウイチに迷惑だと思うけど」

(アスラン！余計なことを!!)

「うくん。でも一人で食べるのは寂しいと思うよ」

「はあく。仕方ない、誘って来るから待ってろ」

「…」

「…あの、ソウイチ君」

「ソウイチで良いよ。何？」

「えっと、ソウイチ、良ければ俺達と一緒に食べないか？」

「…良いですよ」

「初めまして、ソウイチ君」

「君付けは、止めてください。ソウイチでいいです」

「…ごめんね。えつと、ソウイチ。僕の名前はキラ・ヤマトって言うんだ宜しく！」

「俺はアスラン・ザラだ。宜しく」

「ソウイチ・アヤサキです。これからも宜しくお願いします」

「ところで、アスランはロールキャベツが好きなのですか？」

「ああ、好きな食べ物だな」

「なら、僕のロールキャベツ食べたすか？」

「えっ?! い、いいよ! 遠慮する!」

うん。駄目ですか。まあ、焦らずにいきますか。

くソウイチ帰宅く

はあく。つまんなかった。キラ達との会話以外は本当につまらなかった。あとクラスメイトの中におかしな人達もいるし。

暇になってしまった。… そうだ! ラウル・ク・ルーゼと会話しよう!

くクルーゼの艦長室く

ピピピピピピ、ピピピピピピ (r y

「どうした、何かあったのか？」

「こんばんは、ラウ。ソウイチだ」

「…ソウイチか、何処から通信している？」

「月から通信している。ラウ、暇だし、何か話し相手になってくれないか」

「…ソウイチ、今、忙しい、今度にしてくれ」

「わかったよ」

そう言って、通信を切った。